

巻頭言

第六感、あなたはどの思いですか

西松建設株式会社 代表取締役副社長 一色 真人



もう二〇年以上前の話ですが、ある方から「挙動予測が困難な地山や地下水を扱うには現場で磨き上げた第六感が重要であり、第六感とは凡そ一〇年真摯に現場と向き合うことで自ずと培われてくる」と言われたことがあります。この言葉が妙に腹落ちした私は、若手職員に話をする時には、必ずこの第六感の話をするようにしています。ご承知のように、人は生まれた時には誰も第六感を持っていませんが、持つて生まれた五感をフル稼働させ一〇年程度かけて真摯に物事に取り組むことよって第六感が培われてくるというのは全く同感です。思い起こせば、私が入社した時代には、この第六感を持つ大所長が多かったような気がします。特に、地山の異変を感じ取り作業員を非難させて事なきを得たという類の話はよく聞いたものでした。安全な工法や設備が整備されてきた現在では、明らかに現場リスクは低減してきており事故も減ってきていますが、それが第六感を培う機会を奪っているのではないかと感じています。現場リスクが低減することは良いことですが、何か引つかかるものがあるのも事実です。

二〇〇二年にノーベル物理学賞を受賞された小柴昌俊先生も、輝かしい業績を読み解くキーワードの一つに「カン」を挙げています。小柴先生は「カンを磨く方法？それは、とことん考えること。あり

とあらゆる面を検討して、脳みそが搾りつくされちゃうくらい考えぬく。すると、当たりが良くなる。」小柴先生の研究内容がニュートリノ天文学ということもあり、頭で考え抜くことを余儀なくされたのですが、流石にこれは誰にでもできることではない素晴らしい才能の賜物でしょう。しかし、我々には五感で感じ取れる現場があるのです。現場と向き合い、見て、聞いて、嗅いで、触って、感じてください。考えてください。現場リスクに対する第六感を培うことは誰にでもできるのです。

人口減少や労働力不足等の国内に抱える問題と、世界の動向によって激しく変化するグローバル社会の中で、企業経営の舵取りも困難を極めてきています。こんな状況におけるキーワードの一つとなるのが、やはり研ぎ澄まされた第六感ではないでしょうか。誰も経験したことのない、答えのない問題が山積みしています。

最後に一九六八年にノーベル物理学賞を受賞された江崎玲於奈先生の言葉で終わります。私にはこの言葉の中にも第六感を培うことに繋がるものを感じています。「すぐれた科学者は一芸に秀でた人間というよりも、むしろあらゆる視野を兼ね備えた教養人です。この幅広く、多角的な視点を持つということが、創造性の原動力になるのかもしれない。」